

作東の文化

No.48



作東文化協会

作東の文化

No.48



写真「宮原獅子舞」江見精治

令和4年10月

題字

真野みよ子

表紙写真

題 「大 輪」

ちぎり絵 杉本幸子(柿ヶ原)

表 紙 説 明

みなぎる太陽の光をはね返している様な
パワーを感じながら描きました。

目次

巻頭言

「東洋の楽園」小笠原……山下 亨……………1

特別寄稿

一首に同文字の無き作……横山 猛……………3

所感寸言

足元から、SDGs……西村睦美……………6

伝承……長瀬真澄……………8

電子時代……井上健一……………9

地名に思う……岡本昌弘……………10

十八で成人するということ

……鳥形初美……………12

学校の制服を振り返る……有友一正……………13

随筆随想

田んぼ暮らし……前田留菜……………16

楽しかった音楽人生……谷口勝昭……………18

書と筆……長家豊丘……………20

人それぞれ……日笠一成……………22

走れワン君……圓東光夫……………23

花火 夏の夜の夢……浅田年史……………24

こぼれ種やあーい……影本昭子……………25

老・老・老……と生きて……安東公一……………26

「ええ死に」とは……黒石初江……………27

歴史紀行

太陽と鳥居の不思議な現象

……横山征彦……………30

美作を愛した歌人と俳人

……矢内直行……………33

因幡と美作の漆の歴史……橋谷田岩男……………34

角南の地名と姓……井口祥子……………36

小泉八雲の出雲街道急ぎ旅

……延原順子……………37

旅の感動……山本進一郎……………38

時代と共に生きる……妹尾美智子……………40

令和四年度研修旅行の報告……………41

令和三年度文化展開催報告……………43

短芸

俳句

走り茶……………	春名はるを……………	45
一瞬の夢……………	豊田 絢子……………	45
織部灯籠……………	山本 宗雨……………	46
笹百合……………	青山美和子……………	46
音……………	沖田はるみ……………	46
雨蛙のヒツチハイク……………	井上 虹里……………	46
残菊……………	井口 祥子……………	47
若葉風……………	杉本幸子(土居)……………	47
青嵐……………	高橋ヤエ子……………	48
葉桜……………	樽井悦子……………	48
CO2……………	坂井はつ子……………	48
秋夕焼……………	山本真由美……………	48
木槿咲く……………	山下三景……………	49
ひとすぢ……………	山本那実……………	49
川柳……………		
廻る世界……………	影本 守……………	50

ケンタウロス……………五反舎……………50

短歌

幼児……………	和田真佐子……………	51
生の齧々……………	島根和江……………	51
馬の背……………	福島美智子……………	52
夏の景色……………	佐々木美奈子……………	52
出雲街道……………	岩本敏子……………	52
頑張れ……………	杉本幸子(土居)……………	52
幸せさがし……………	丘野道子……………	53
小さきダム……………	坂井はつ子……………	53
幸くあれ……………	中村千州代……………	54
うれしいね……………	平瀬芳子……………	54
温もり……………	岡田仍子……………	54
春が来た……………	土井つゆ子……………	55
指一本……………	末宗玲子……………	55
老いたる身へと……………	松井洋子……………	56
山峡に暮らす……………	黒石初江……………	56
勉強モード……………	新田千晶……………	56
今だから……………	日下智加枝……………	57
八十路なる日々……………	豊田 絢子……………	57

三歳児検診	小林洋子	57
水	長澤和枝	58
戦を憶ふ	黒石登代	58
をりをり	入矢敏江	58
母は百歳	濱田くに子	59
ワイン	角利津	59
愛三題	須田紀秋	59
無用の木	山下三景	60
神よ許すは勿れ	関内 惇	60
作東文化協会グループ紹介		61
令和三年度 作東文化協会事業報告		65
令和三年度 作東文化協会決算報告		69
作東文化協会会則		70
令和四年度 作東文化協会会員・役員名簿		72
編集後記		80



〔巻頭言〕 「東洋の楽園」小笠原

会長 山下 亨

東京の晴海埠頭からおがさわら丸で南へ約千キロ余を航海すると、小笠原諸島の父島(北緯二七度二見港に着く。この航路は、宇喜多秀家の眠る八丈島を過ぎ黒潮を横切ると大海原にクジラやイルカが姿を見せる。小笠原村は、過疎地ではない。観光と漁業の村に若者が移住してくるから人口が毎年微増し現在三千余。小笠原に空港はなく現在には世界自然遺産に登録されている。

私は平成四(一九九二)年四月に父島に単身赴任した。ここは太平洋の常夏の孤島。タコノキやグアバなど熱帯特有の植物が繁り、パイヤ・マンゴ・パッション等の熱帯果物が豊富で毒へびもサンリもない。人々は「東洋の楽園」と呼ぶ。透明度一〇〇mの海にサンゴ礁が輝きアオウミガメが泳ぐ。漁業資源が豊富で漁港にはマグロ・カツオ・イセエビなど多くの魚種が上がる。農業も盛んで島特有の赤土(ラテライト)の畑ではトマトやジャガイモ等多くの野菜類を収穫する。

父島は暑い。平均気温は二三度。真夏は四〇度を超えるが、車の冷房で島内移動に苦労しない。ガジュマルの木陰は海風も受けて涼しい。正月元旦午前〇時には大勢の観光客や島民が世界一早い初泳ぎをしたり初詣に行き新年を祝う。

島では水と電気には困らない。日用品は内地並みの値段で揃う。食堂や居酒屋ではウミガメ料理や島寿司も味わえる。観光客は海洋レジャーに民宿かホテルを利用する。宿では魚料理やズッキーニの天ぷら等島の野菜料理も味わえる。盗難や殺人事件は聞かない。島民は「回りが海で逃げられないから」と笑う。

島々の熱帯性植物や鳥類・虫類などの固有種率は四割を超え「東洋のガラパゴス」と呼ばれる。山では年中ウグイスやメグロが鳴きノスリが空に舞う。七色の夕日輝く海岸をオガサワラオオコウモリが飛び交う。

全島ごとく観光地であり、熱帯性の自然に満ちている。

さて、小笠原は約四百年前の一五九三年に家康の命で小笠原貞頼が発見(探検)。一六七五年に幕府が調査し島々に父母兄弟婿などの名を付けている。一八六一年外国奉行水野忠徳一行が訪島巡察した際にはハワイからカナカ人らが一八三〇年に入植し開拓した経緯を調べた記録を残している(『勝海舟全集』に収録)。

日本の時代の変わり目には何かと小笠原が関わる。幕末開国を迫るペリーが何度も寄島しジョン万次郎も通訳に來ている。日韓併合後には朝鮮独立党首金玉均が亡命し島民に詩歌を教えた。終戦間近かの硫黄島は日米激戦の地となり、栗林中将ほか日本兵約二万名が戦死。小笠原の施政権は米国に移ったが、昭和四三(一九六八)年六月に日本に返還された。父島には防空壕や砲台などの戦争遺産が残る。

父島から見て日本列島はバナナの形。北海道から沖縄までほぼ等距離にある。小笠原は台風の発生する海域でもあり、昭和三五(一九六〇)年五月のチリ大津波では島々が内地への防波堤となった。津波は十数メートルの高さで来襲したが、島民は伝承(知恵)と自力で我が身を守り、死者はなかった。

ある日、村の古老から昭和天皇が昭和二(一九二七)年七月訪島されたときの話を聞いた。彼は「元首は遠い領土を大切に。平成も四年目、天皇の御視察を」と強調した。その一年半後の平成六(一九九四)年二月、平成天皇ご夫妻が硫黄島に戦死者を慰霊され父島を御訪問。村の人々と親しく懇談され特産のコーヒーを楽しまれた。明治九年父島に植樹されたペルーコーヒー一本が一万株のコーヒー農園になっていたのだ。令和の御世、天皇ご夫妻のご訪島が待たれる。

小笠原の島生活、独特の歴史文化を学んだことで、私は物の見方考え方や人生観・価値観がすっかり変った。内地に帰任して三年目の一月、阪神・淡路大震災が発生。神戸で支援対応して以降、震度5以上の全ての震災現場に足を運んだ。被災地はどこも「孤島」。これがバナナ形の列島ニッポンの現実である。南の果ての小笠原。紺碧の空、紺碧の海、常夏の平和な小さな島々。現代人が心を休める楽園がここにはある。

特別寄稿

一首に同文字の無き作

特別顧問

横山 猛

(歌人)

古今和歌集に惹かれて読み進んで行くと、次のような作品に出会った。

同じ文字なき歌（巻第十八雑歌下九五五）

世の憂き目見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそほだしなりけれ

作者は「物部良名」とあるが、伝未詳でこの一首しか掲載されていない。多分、身分の低い人であろうが、珍しい作品なので取り上げられたのであろう。

読み返しているうちに、私も頭の体操に詠んでみようかと思いついて、次の様な短歌を詠み上げてみた。（旧仮名遣ひで）

あかねさす よしのむら(吉野村)こそ みほとけが
じひ(慈悲)をいだきて おはせるば(場)なれ

いつまでや このよ(世)にあるは もうゆかむ

さげすみながら ひとたち(人立)をれば

うつのみやに す(住)むこどもから メールあり

オミクロンゆゑ きせい(帰省)はだめと

えんがはで おほきあくび(欠伸)を なしたれば

だるま(達磨)さへわらふ やようつけもの(売者)と

おもひでを むねにだきゐて べいじゆ(米寿)なる

あふせ(逢瀬)まつわれ はや(早)くこ(来)よかし

かくありて いざはやよ(詠)まむ みそひともじ(三

十一文字) われのうちをば さらけだすがに

きのいろを はつかみせある ふくじゆさう(福寿草)

わがむらにぜひ ちぎ(地祇)よびこめや

くちびるを かみしめさむ(寒)きに たへてゐつ

びんぼふそたちの われとぞおもひ

けんくわ(喧嘩)など してあたりまへ むそとせ(六十年)を ぶじにいきゐる おろかもなれば
 こ(冬)ふたび(旅)や つひ(終)のちめざし ゆきをりぬ
 どんとはら(肚)すゑ むねまでみせて
 さあけさ(今朝)は うたをつくりて かきおかむ
 べいじゅとなれる このわがみ(身)にし
 しづけかる やぬち(家内)にぼつんと くらすひを
 おもへばなみだ(涙) こぼれてきたり
 すさまじき おとたてながら ふくかせに
 あつど(厚戸)をしむれば いへ(家)はやみよ(闇夜)ぞ
 せかされて みまひにゆけば ちい(爺)どのは
 しんざう(心臓)やむとぞ あふすべもなき
 そんがいを あたふることなく ひのさ(去)りて
 やすらかにね(寝)む つき(月)よみまも(見守)れ
 ただひとつ き(気)にしゐるのは よろめいて
 テニスボールを うちそこなふわれ
 ちりてこそ またさくとき(季)も むかへんに
 しち(支持)のおつるを うれふやプレジデント
 つきはてぬ おもひにけふ(今日)こそ うた(歌)をよ
 (詠)め いかなるじげん(次元)の さく(作)やしあ
 (生)れむ

てつだひは なすことあらねば おい(老)つま(妻)の
 ゆびさばきにし みほれゐるわ(我)よ
 ともだちに あ(公)はずてきつげば じふねん(十年)ぞ
 たのしむくわい(会)を すぐさまひら(開)かな

以上二十首、大変な苦労だったが、何とか詠み上げることが出来た。何度も何度も間違えたが、お蔭様で、日本語の複雑さ・微妙さ・豊富などを改めて知ることが出来た。

とてもよい頭の体操になると共に、認知症予防にもなるので、皆さんも挑戦してみてください。



所感寸云

感想や批評を文章で表現する

簡単そうで難しい

しかし文章化されることで

新たな感想や批評が生まれる



ちぎり絵「笹百合」唐内治美

足元から、SDGs

西村 睦美

令和四年六月一六日、『上流から環境を考える』と題した作東公民館講座に参加した。

県北に暮らしていると、海とは無縁と思いがちである。「ウミガメの胃からプラスチックみ発見！」というニュースを聞いても、どこか遠い世界の出来事だった。外国語が印字されたプラスチック容器などの映像が流されると、さらによそ事になった。

しかし、海のゴミは確実に私たちの暮らしが出している。ビニール袋やプラスチックばかりでなく、マイクロプラスチック・プラスチックという形で、海に大量に流れ込んでいる。産業廃棄物ばかりでなく、生活、ごみが大量に流れ込んでいる。ましてや瀬

戸内海は大洋ではない。内海だ。そのごみは、紛れもなく私たちが出した「暮らしのごみ」だ。

環境を考える講演会という、「科学的な視点から、専門用語を多用して、地球規模で環境保全を考える。」といった高いレベルを想像して、なんとなく敷居が高かったが、この講座は、暮らしの足元から「河川や海のゴミ」を考えさせてくれた。「ごみは、私たちの暮らしが生み出している」という至極当たり前のことを、改めて意識させてくれた。かつての「公害」のように、何か悪徳な他者が流し込んでいるのではない。私たちが普通に生活している中で、意識しないまま、悪意なく、川に、海に、



清掃活動後



吉井川河口付近のごみ

流し込んでいるのだ。

一番、驚いたのは「プラ肥料殻ごみ」。これが河川敷や砂浜に流れ着くと、小さな石粒にしか見えない。しかも、擁壁に付着すると、取れないという。

次に、マイクロプラスチックやプラ糸くず。プラスチックの劣化等により粉々になったマイクロプラスチック、化繊の服から洗濯水に溶けだしたプラ糸くず。これらが生活排水として川から海に流れ込む。しかも、回収は不可能だという。これはもう、私たちが極力出さないようにするしか方法はない。

実際に、農業従事者の方がプラ肥料殻ごみが下流に流されないように工夫を始めておられるという実践例も伺うことができた。さまざまな形

で、足元から安全安心な環境づくりが始まっている。

では、あなたは何ができますか？ アンケートにあったこの問いかけに、今すぐにも私ができることを一生懸命考えてみた。まずは、いつもの暮らしからできることだ。食品ロスを生まない。余分な食べ物や余分な衣類、余分な日用品を買わない。ごみの分別やリサイクルを徹底する。まずは、「食べ、尽くす」「着尽くす」「再利用し尽くす」ことからスタートだ。

足元からSDGs。決して大上段に振りかざした目標ではない。私の足元の第一歩、そこに小さなSDGsがある。

(津山市在住)

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



伝承

長瀬真澄

八月九日、防災の日が田原の地区にやつてまいります。悪夢のようなあの日からすでに十三年、日常の煩雑さに紛れている私たち田原住民にやつてきます。

この日は地区民が集い、黙とうを犠牲者の方たちに捧げます。誰がルール化するでもなく自然にこの行事が定着されてきました。もちろん、当時の区長をはじめ地区民の方々の努力があつたことは当然ですが、きわめて自然に当然のこととしてこの行事は行われ続けています。

東北大学の研究で東日本大震災において津波の高さと死者数の関連性を調査したところ必ずしも比例せず地域によりバラバラであることが分

かりました。その原因が何なのか調査が進むにつれ「地域伝承」というキーワードが浮かび上がつてきました。過去の経験がうまく伝承されているかどうか、それが死者の救に大きく影響されていたのです。

真備町、過去何度も水害に見舞われ記録も多く存在していた。ここでも伝承が確実に行われていたでしょうか。倉敷、総社のベッドタウンとして新興住宅地として急速に発展したため住民の口伝による伝承は極めて困難と思われる。



防災記念の碑（田原地区水害崩落復旧地）

私たちの地域では逆に急激な人口減少でこれがまた伝承を困難としております。伝える責任を持つ世代と承ける責任を持つ世代が通じ合うための知恵が必要なのかもしれません。温暖化と社会情勢の変化、自然現象と社会問題、私たち個人には解決不可能に見えますが、温暖化と社会情勢変化もその個人の意識の総和で

あることには間違いありません。二〇三〇年問題をZ世代に丸投げするような無責任さはついには逃げ場を失うでしょう。

伝承が無理もなく形骸化することもなく行われていく、そのためにはその地域の人々の知恵と人柄、それを醸し出す風土、これらが素朴で地味な伝承を可能とすることでしよう。



電子時代

井上健一

五十年以上に前にアポロ十一号が月面へ着陸し、アームストロング船長が、人類初の地球以外の星への第一歩を踏んだ映像は、世界中に放映された。喜びに沸く宇宙センターの様子も放映されたが、映像の中に大きなコンピュータが沢山映っていた。

その当時、既にコンピュータをモジった漫画を見た記憶がある。コンピュータを風呂敷で包み背負っていく先々でデータを入力し、答えを聞いている姿は現在のノートパソコンそのものだ。

現在ではコンピュータは超小型に

なり、あらゆる方面で活躍している。コンピュータを組み込んだ人形が喋ったり自由に動き回る、コンピュータが運転する無人列車が走り、無人のヘリが離着陸し農薬を散布したり山岳地帯の物資の輸送等も行われている。自動運転の自動車も走り、飛び出した動物さえ避けて通れるロボットカーが登場する世の中になった。

しかし、ロシアが侵攻し今でも戦火が続いているウクライナとの戦争にも、多くのコンピュータを組み込んだ兵器が使われていて殺傷能力を高めているのも事実だし、巨額の振り込みミス等の事件や、迷惑商法や詐欺事件等のコンピュータを使った犯罪が多発化している。

日常生活でも、数え切れぬ程のコンピュータを組み込んだ機器が発売されている。今こうして書いている

文章もパソコンを使用している。弱視なので音声を聞きながら横書きで文章を作成しているが、完成すれば原稿用紙の仕様にし、縦書きに変換する訳だ。最近では靴にコンピュータを組み込み、視覚障害者の歩行を援助する物まで登場している。車椅子にもコンピュータが組み込まれている物も既に発売されているそうだし、指の動きが生身の人間の動きに近い義手や義足も開発されているとも聞いている。

平和に利用されればこれ程頼りになるものはないが、悪用すればこれ程怖い物も無い。善か悪かを見極める努力も必要だと思える。

地名に思う

岡本昌弘

私は幼い頃から、学校から帰ると、竹田だけでも自分を含め人人もの同級生がいたが、友達と遊んだ記憶はない。南の山に一人遊びに行くのが日課だった。県営農地開発でほとんどなくなってしまったが、白石公園が自分のあそびの原点、そこから茅尾に降りたり、大滝様あたりの枝沢に登ったり下ったり、笹尾池では足がすべり首まで水の中に落ちた事もある。この頃は竹田も活気があり、葉たばこ農家や、野菜、花木作りに熱心に取り組み、山外野に行けば広大な茶畑もあった。小学校三年生ぐらいになると、東は柿ヶ原から尾根を越えて、白水の官林まで、南は俗に呼ぶ滝の宮、西は郷路山まで行く、



天空のひまわり畑(高原)

不思議と山家川を渡って北には行った記憶がない。歩きまわるうちにだんだんと樹木や宿根草など草木類の名前がわかって来た。

そんな中で、次の時代に残って欲しい地名を紹介したいと思う。

小字で紹介したいのが、横吹^{よこぶき}で、横に向くほど風が、特に冬はきついなと言ふ意味でこの名がついたとの事。現在は原一田淵線が走っている。

二つ目は単なる地名だが、原の方は知っているとしますが、郷路山の吉野川筋、ここは夏は涼しいが冬はともかく冷たい。

三つ目は寒吹^{かむき}で竹田の茅尾から、今は閉められた日の出キャンプ場方向に標高差二百メートルの尾根道を、三百メートル登り切ったあたり。ここも風が強く、今も赤松の原木が十本程度点在している。

四つ目は、この尾根全体を登り尾と呼ぶ。尾根筋の桧や杉、上部の雑木は大きくなり、いつでも登り下りが可能となった。

五つ目は竹田の小字岩戸地内の岩戸川すぐ横にある、守方さんを紹介したい。代々、現在の川北は今在家

に、男子で生まれたら、江見次郎佐衛門守方と名乗る武家集団があった。平家方に付いていたため安徳天皇を抱いた女官と伴に、西の海に没し、平家狩りが二十年近く続き、やっと収まった頃、今の美咲町の寺に隠れていた娘が、遺髪^{いばつ}を土中に入れた、いわゆる供養塔^{くようた}と聞いている。竹田、岩戸地区にもこの供養塔の由来を知る人が少なくなつた。

江戸時代が終わり、明治に入った頃は、日本の人口が二千万とか三千万とか、諸説あるが、私は人口減は特に問題だとは思っていません。だから竹田地内の水田の半分くらいが竹林に戻るだろうし、山奥に細く長く入っている水田が湿原となり、雑木林に戻る日がやってくると思う。だが、聞き伝えの固有の地名はもうしばらく残って欲しいと思つている。



書 小倉美穂

十八で成人するということ 鳥形初美

娘が中学生の時、何かの出来事で、「もう子どもじゃないんだからっ！」と私が言ったら「おかしさん、私はまだ子どもだ」

と言われたことがありました。

…そっか、アンタはまだ子どもだったんだ…と思つたものです。中学

卒業したら大人になっていてほしいと思つていたので、できるだけ子ども扱いしないようにしていました。でも二十歳までは親が責任を取るのだから、嘘はつかないようにとか、連絡は必ずするようになど多少の約束していましたけれど。

子どもは「私は子ども」という自覚はいつまであるのでしょうか？そして、大人になった！という自覚が持てるのはいつなのでしょう？社会での扱いは成人になった日を境にするけれど、本人の自覚や覚悟がそこを境にできるのでしょうか。

成人年齢が十八歳になったと決まつた時、マスコミは子ども達にはか

り注目していたようですが、私は親の方が大変になるだろうなあと思つていました。二十歳まででも大変なのに十八までに大人になるように育てないといけないのだから…。

自分の時はどうだったのかなあ？二十歳になつても、自分は子どもだと思つていた気がします。社会が大人として扱うから何事も自分で責任取らないといけないんだという覚悟らしきものはあつたかもしれませんが。二十歳になつたら何ができるようになるのか？知らないことばかりだったし、学習の機会もなかつたし、二十歳になつてからいろいろなことを学びました。その当時の世の中はそれでいいという感じで社会が若者を育てていたような気がします。

今は、成人した若者を社会が育てるという感じに思えません。成人し

成人式は令和5年から「二十歳の会」になります



たら大人としての責任を持たされ取
らされ：だから、それまでにたくさ
んのことを知っておかないといけな
いよ。という感じではないでしょう
か？これからの子どもたちは学校や
家庭で学問以外に多くのことを学び
学習し。十八歳になる前に大人にな
る覚悟を持たなければいけないとい
うことになるでしょう。

学校の制服を振り返る

有友一正

大正十三年、林野高等女学校は一
年生の制服を和服から洋服に変更。
これが岡山県初のセーラー服導入で
あったとの新聞記事をきっかけに、
作東公民館で「制服の歴史写真展」
を開催することになりました。林野高
女の袴の帯に付けられていた円形バ



ツジが、セーラー服の左胸に取り付
けられているのが、変更時の特徴で
す。(写真①)
一方、義務教育の小学校では、家
庭の経済条件が幅広いことから制服
の制定は難しかったようですが、時
代とともに服装は変わっています。

わが母校栗井小学校の閉校記念誌を
見ると、明治・大正期の児童は和服
の着物に袴をはき、男子は学生帽を
かぶっていて、男の先生は詰襟の服
が多く見られます。昭和に入って、
男子が詰襟の学生服を着るようにな
り、男子のほぼ全員が洋服の学生服
になった昭和九年に、女子の一部が
洋服(セーラー服)を着用しはじめま



①大正13年頃 林野高女セーラー服導入

②昭和21年 植松の栗井小学校児童



す。戦局が悪化する昭和十七年には、女子のスカートはモンペ、ズボンに変わりました。戦後十年間も同様でしたが、平和な時代になり、児童たちの明るい表情が見られるようになります(写真②)

昭和三十年代半ばになると、各小

服制定の動きが高まっていきました。昭和三十九年度の栗井小学校の卒業写真では、女子は丸襟スモックとスカートで統一されています。昭和五十一年には、男女ともブレザーとなり、平成二十七年の閉校時(写真③)まで続きます。

なお、林野高校は、平成十九年に男女ともブレザーとなり、制服を一新しました。作東中学校は、統合当初から男子は詰襟学生服、女子はえんじのネクタイのセーラー服の伝統的なスタイルです。

髪型や靴下の履き方なども時代とともに変遷していますが、男子がズボン、女子がスカートという形態は基本的に続いています。学校の制服は日本独特のものとも言われますが、多様な配慮のなかで性差に関係なく選択できるジェンダーフリーの制服



が導入され始めています。時代を反映して、制服のあり方を見直す転換期を迎えているといえます。

(参考文献『林野高校創立百周年記念誌』『セーラー服の誕生』)

③平成27年1月 栗井小学校統合前の最後の卒業写真

随筆随想

折にふれて

感じたことや

見聞・体験を

なにくれとなく

書き綴る

思いのままに



洋画「仲良し」西井ひろみ

田んぼ暮らし

前田留菜

五十年ほど前、私が農家に関わって暮らしていくことになった時、ここで暮らすことの良さは何だろうかと考えました。ご承知のように、当時農家の暮らしはかなりマイナスイメージでした。封建的家族制度、きつい汚い農作業、安い賃金、わずらわしい部落つきあい等々です。若者は次々と豊かさを求めて都会に出ていく中、流れに逆行してそういう村社会へ入り込むことになった私は、ここで暮らすことの良さをじっくり考えました。

まず、三世代同居です。家長一人に全員従うというのは私には息詰まる思いがして無理でした。それで担当を分けてもらうようにしました。

私は米作りをするので、私に任せてもらいたいと言いました。

自分がやりたいことをやり、気楽に暮らしたいために一人暮らしや核家族になるのもいいですが、私は今、三世代四世代同居のなかでの自由な暮らしを豊かなものと思っています。

町社会は分業社会です。自分と他者、うちとよそ、仕事と遊びなどなど分化されています。分化、相対関係にはそこに争いが生まれやすいです。分化しても、もともとは一つだったんだというところが見えにくくなってしまふからだと思います。

村の暮らしには、別れつつひと繋がりなところが見えやすいと思います。私はそれこそが豊かな社会だと思います。

思っています。

田んぼで働きながら子育てが出来る、近所づきあいも気分転換もできる。体力づくりのスポーツセンターもある。収入を得ながら同時に何もかもやれてしまえる。これこそが合理的ではないかと思います。





町の経営者は必死に経営合理化を
考え、そこで働く人も必死になって
働きつくし、休日こそはと息抜きを
しますが、仕事の中でくつろげれば
これこそ合理化ではないかと私は思
います。そんなことを考えながら田
んぼ暮らしを楽しんできました。地
球は人間だけのものではないという

思いはそのゆとりの中にあるこそ
湧いてくるものと思います。

田んぼに水が入るといつせいに蛙
が鳴きはじめます。ここは蛙の国か
と思うほどです。田植えが終わると
待ち構えていたように田泥から豊年
蝦、兜蝦、貝蝦などが湧き出してき
ます。田んぼがなくなればこれらの
生き物は消えていってしまうでしょ
う。

赤蜻蛉の仲間で薄羽黄蜻蛉は田ん
ぼでいつせいに産まれます。今年は
七月九日でした。つぎつぎと羽化し
たあと、夜明けまで稲葉にしがみつ
いてじっとしています。一つの田ん
ぼで五十匹ほど数えて止めました。
群れ蜻蛉は生まれるときから群れを
なしています。

こんなことをして私は日々暮らし
ています。仕事だ遊びだ勉強だ、な

んだかんだが分かれていけないので、
それらの関わりあい争いにならず、
ほとんどストレスになりません。地
球環境的に合理的かなと思っていま
す。

私は今、俳句を続けておりますが、
どこの結社にも属していません。そ
ういう方向でただ気ままに楽しもう
と思っています。美作では山本那実
さんの別宅でいっしょに句会させて
いただいたことがあります。お庭に
滝があつてすばらしいところでした。
十五年ほど前までは田んぼでいろ
いろやっていました。アトピーの子
供達のための無農薬米づくり、れん
げの花咲く田んぼでの大勢の子供た
ちを招いての交流会などです。宅配
でお米の全国配送していた時には
『れんげ通信』を添えていました。
その頃、江見のバレンタインパーク

の立派な建物で農的暮らしに関してのミニ講演をさせてもらったことがあります。懐かしい思い出です。

(総社市在住)

楽しかった音楽人生

谷口勝昭

父が県の公務員だったので、幼いころは父の転勤に伴って県内を転々としてきました。義務教育を終わるまでに六つ学校を変わっています。幸いにして高校三年間は転校もなく、父の故郷・幕山(才金)で育ちました。杉坂峠を越えて作東の親戚にも度々行った思い出があります。

幕山の家は大きくはない山々の谷の奥に四軒の家がある小さな集落です。山の中なので、ラジオの入りが良くありません。大人たちは高い洋

服ダンスの上にラジオをおいて野球放送を聴いていましたが、ラジオを下におろすとうまく入りません。私はラジオ講座が聞きたかったので、短波の入るラジオを買ってもらって、短波でラジオ講座を聴いて勉強しました。イギリスのBBCとかアメリカのVOAが聞こえて楽しかった思い出があります。

そんなある日、ザ・ピーナツの「小さな花」(ブレイトフルー)が偶然入ってきたんです。

きれいな声と美しいハーモニーにとっても感動しました。中学時代に男性ヴォーカルをやっていたので、喜びはひとしおでした。それを契機に「もう一度音楽をやりたい」という願望が強く湧いてきました。学校には音楽部も吹

奏楽部もありません。音楽の先生はいました。時間が、講師の先生なのので、授業が終わるとすぐ帰られるので、指導



マンドリン・オーケストラ演奏会 (佐用町)

は受けられませんでした。

大学は教育学部だったので、音楽の副専攻を受講しようとして申し込みましたが、「ピアノの台数が足りない」という理由で断られました。やむを得ず四千元でヤマハのギターを買ってマンドリンクラブに入りました。

父からの仕送りは月四千元だったので、この出費は大変でした。当時のギターはスチール弦だったので、左手指にまめができてそれが弦で切れて血がでる。治るまで痛くて練習できません。やがて左指の先端はタコになって弦で切れることはなくなりました。

二年生になって、私はサブコンダクターに指名されて、五十人のメンバーの指揮をすることになりました。それが私をマンドリン音楽にのめり込ませた始まりです。四年生の時に

は京都学生マンドリン連盟の第二回演奏会の指揮をしたり、充実した音楽生活を送りました。

高校の教員になって、当時の兵庫県立竜野実業高校でマンドリンクラブを創って、高校生の情操教育として演奏させました。そのころ高校生の発表に機会がなかったので、近隣の高校を集めて、「器楽連盟」を創り、姫路市で発表させました。この連盟は今も中学校も入れて五十四年間続いています。転勤先の福岡高校でもクラブを創り、新宮高校や姫路西、香寺高校にも指導に行き、楽しい教員生活でした。福岡高校勤務の頃は生徒が文部大臣賞を受賞したり、ドイツと交流して、日本の高校生を二回ドイツへ連れて行って演奏し、ドイツ人も日本に来て演奏してもらいました。私も二回ドイツに行き、楽

しい思い出です。ドイツではホームステイ先の子供にドイツ語を教わり、今も覚えています。

福岡高校を退職する頃、元姫路西高校の音楽の教員であった真下恭先生が、姫路市に大人のマンドリンクラブを創ってくれと言われ、姫路市から二年間で六百万円の補助を受けて「姫路バルナソスマンドリン・オーケストラ」を設立しました。発足当時は七十名の団員がいましたが、今は五十名くらいに減りましたが、十三年間続いています。コロナで一回飛びましたが、今年十月三十日に三十二回目の定期演奏会をアクリエ姫路で実施します。

佐用町では四年前に「ギターマン・ドリン教室」を開いて、その卒業生を中心に三年前「佐用ギター・マン・ドリンアンサンブル」を結成し、今

年は十一月十二日にスピカホールで第三回の定期演奏会を実施します。

今は年を取って、腰が痛く、立って指揮が出来ませんので、座って指揮をさせてもらっています。思うに楽しい音楽人生でした。

(佐用町在住)

書と筆

その昔から文字を書くことに長けた人物は数多いものだ。その中でも世間(特に書道界)によく名の知れた渡った人物として、弘法大師(空海)がいる。

その空海の書に関するエピソードとして、「弘法も筆の誤り」「弘法筆を

長家豊丘



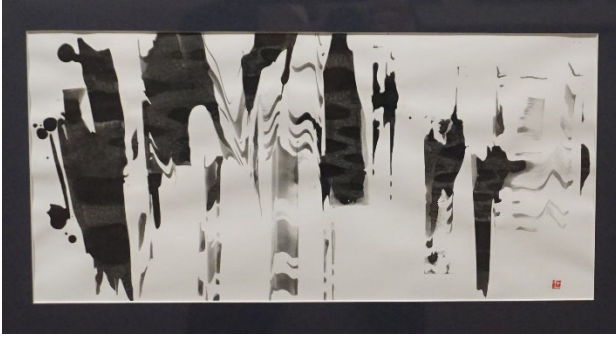
墨絵 大寺美保子

選ばず」など、時として話題にも上り言葉として発せられることもある。しかしながら、その真意を取り違えて発言している人もかなりいるのではないかとふと思ひ、この「筆を選ばず」のエピソードをわたくし自身に経験値から考察してみることにし

た。

書家、書道教師の道を志した当時(昭和四十年代前半)の学生生活は皆仕送りだけでは苦しく、わたくしもアルバイトとして筆耕を『銀座三越』の酒売り場にて行うこととなった。その時の担当者は、「このような筆で申し訳ないのですが、「筆を選ばず」ということで、何卒よろしくお願ひします」との言葉とともに「二十円と打たれた小筆二十本ほどを渡してくれた。頂戴した筆は、質は猫かイタチの筆の先(命毛)と整っていない代物だった。どうにか実用書の使用には耐え、中元札に「林家三平」という個人名を三百枚書き入れはしたが、いちいち鋒先穂先を整える作業も加わり時間もかかり、おぼつかなく自分としては満足できるほどの仕上がりでではなかった。他の先輩諸氏に

もろもろ尋ねたところ、自前の筆(当時三百円程度)を使用しているとのこと、わたくしもそれに従って以後のノルマを果たしていった。因み



「波紋 横への永遠の繋り」長家豊丘

に、五六本使用した残りの配給筆は今もこのエピソードの記念品として手元に大切に保管している。

見るたびに「筆を選ばず」の意味として、「どんな筆でも立派に書くことができる」という解釈は誤りであろうことを、経験を通して学んだこととして思い出す。

「筆を選ばず」の真意は、「一本のすばらしい筆があれば、どのような書体でも、筆を取り替えることなく書きこなした」ということであろうと考察した。

その観点から、以来、わたくしもお気に入りの筆(細光鋒・長鋒)で、甲骨文字から隸書、木簡、草書、楷書等の筆法・用筆法を学び今に至っている。

結論として、ネズミのかじったような穂先の筆では、一般的な美しい

文字を書くことはやはり無理のようだ。もっともわたくしが作品づくりを志してきた墨象系抽象系の創作には、筆の代用として作品効果を上げるため、タワシ、段ボール、雑巾などの生活用品を使用することもある。その観点からすると、ザンバラの筆でも不可能とはいえないかも……。



人それぞれ

日笠一成

日常生活、節目のとき、時勢の変化のとき、自分一人では対処や制御のできない事件のときの自己決定・自己責任についての思いを述べさせて頂きます。

日常生活の中で、例えば日常の生活上では普段着購入等経費の場合は自己決定で購入する、そして着てみて不満が有っても、自己責任として受け入れる。

不動産の購入・投資等高額物品購入の場合は、誰かの知恵を借りる、助言などをうける。最後は様々な情報を自分で分析・判断・決断して、その結果が自分の願い・思いと違っても自己責任として受け入れる。

各世帯・各家庭・個々においても

何々記念日・何周期目などの時、其々に相応と思う催しを計画したことを変更する場合は自己責任として受け入れる。

年単位と少し長い間隔での恒例行事なども昨今のコロナウイルスの発生等予期せぬ出来事で実行日を変更しなければならぬときもある。

社会の変化、予期せぬ事態に対しても自分で決断しなければならないそんな場合もあり自己決定・自己責任となる。

例え話を申し上げましたが、長い人生行路の中で諸問題・課題に対して自分なりに最善策を編み出し自己決定した場合はその結果についてはどのような内容であっても自己責任

として受け止める。

社会の一構成員として自分を律して社会活動に参画する必要性を感じ日々葛藤している昨今です。

そんな気持ちでこれからの人生を前向きに楽しく歩んで行きたいと思つていきます。



走れワン君

圓東光夫

「トントントンからりと隣組♪」

という歌があった。たしか戦争中の歌と思うが、我が家の隣り組に犬がおる。茶色で中くらいの大きさ、種類も名前もわからない。しかしこの犬、じいさんと友達だ。

今日は梅雨の中休みという。梅雨は降っているのが本命で、止んだ日が中休みなのだろう。でも人間で見れば日和が通常で降っているのが休日だ。

今日は降らないからじいさんの出番、二本杖で県道を歩く。三軒先の家の前を通る。いつもの通り、「ワン君おるか」と呼んだら、もう先に出ていて「ワン」と鳴く。

「じいさんは夏衣になった。お前は

どうだ」

「年中同じ姿で衣替えはなしだ」とワンは言う。

洋服ダンスは要らないなあ。それもよからう。

「ところでワン君よ、先輩犬はどうした」

「家を出たきりで戻ってこない」

「嫁さんはどうだ」

「時々出張するから要らないさ」と答えた。

次はワン君が聞く番だ。

「山は沢山あるが、どこに登った。」

「前の山、後の山へ造林で度々登った。数えきれないほどだ」

「そうではない、もっと高い山だ」

「生駒山、信貴山、高野山へ登った」

「それは電車や自動車だろ。中国一の大山はどうした」

「そこは自動車で裾野までを走った。那岐山は車で麓まで行っただ。後山は東粟倉だからお寺に参って、清水汲みで度々行っただ。肝心の富士山は東海道線の電車から見た。何年も前から登りたいとは思っているが、まだだ。もう百一歳。足の方が弱ってきだ。もう無理かなあ」

ワン君走れ、走って動くのが動物だ。じいさんはもう走れなくなった。



講演中の圓東光夫さん

終り



洋画「花・花・花」黒石京子

花火 夏の夜の夢

浅田年史

夏になると花火を見るのが楽しみでした。最近では新型コロナのため花火大会もめっきり減ってきたのがとても残念です。

武蔵の里では毎年花火大会をやっていた時期がありました。自宅が花火会場から近いので屋根に寝転んで花火を見るのが私の楽しみの一つでした。花火大会は一人で見ると決め込んでいたのです。

勤めていた頃、職員旅行で花火を見る話が持ち上がりました。気乗りがしませんでしたでしたが仕方なく参加することにしました。

花火会場は海の近くでした。小学生くらいの子を連れた若い夫婦、年配の人、サラリーマンらしき人など

たくさんの方が夏の夜を楽しむために集まってきました。私は一人芝生の隅に座って夜空を見上げていました。

暗い夜空に色とりどりの花火が上がります。まるで真昼のように明るくなります。花火が上がると「ウオッ」「アッ」とか周りの人々が声を上げます。打ち上げが途絶えると静かになり花火が上がると驚きの声が暗闇を伝わってきます。一人ひとりの気持ちの一つになり夜空に浮かぶ光の世界を楽しんでいます。夜空に輝く大輪の花です。

ふと、満開の桜の花が思い浮かびました。その美しさに、私たちは酔いますが、やがて散ってしまいます。

輝いて美しい一瞬を心に仕舞い込もうとカメラに収めます。

花火は花見より輝く時は一瞬ですが、私たちはその一瞬の夢の世界を楽しみます。

最後に何発も連続して夜空に花が咲きました。夜空を見上げる人々の思いは違っても、誰もがひとつの心になっています。花火は一瞬で

すが、現実を忘れさせてくれます。花火を見つめるたっさんの人の息づかいが私に伝わってきました。

最後の一発が消え真つ暗になりました。その暗い空を見つめながら人々の溜息と拍手がわかります。

大勢の人とみる花火、一瞬でしたが、真夏の夜の夢を見させてもらいました。

こぼれ種やあーい

影本昭子

昨春秋、小学二年生の孫が、ベランダのミニトマトの鉢を指さし、

「このトマトもうすぐ食べべられよ。」

と、聞いてきた。

「どうなるかなあ？夏に一度食べたんでしょ。」

「そうだよ。でも、その後からまた芽が出てきて、こんなに大きくなったんだよ。」

どうやらこぼれ種が成長して、三十センチぐらいの高さになっていた。今年の冬、その後の様子を聞くと、「食べれなかったよ。赤くならな

ったし、あれより大きくもならなくて枯れちゃったよ。」

とのこと。寒い冬に向かって夏の野菜は成長できなかったようだ。

昨年夏成長した野菜のこぼれ種が、ずつと土の中で眠り、初夏に芽吹いているのを見ることがある。数はそんなに多くはないが、ゴーヤ、きゅうり、トマトなどの小さな苗を見つけると畝に移植して根つくのを見守ることもある。

また、こぼれ種から育つ花も楽しみの一つである。今年の春はビオラの花々が庭をにぎやかにしてくれた。一つ一つの花は小さいがまとまってたくさん咲くビオラはポリウム満点。これが全部こぼれ種から成長したと思うと喜びもひとしお。夏の百日草、コスモス、ほうせんか、千日紅もこぼれ種から芽吹いた苗を

植えかえた。種の生命力に感謝。

でも、何でもこぼれ種に頼れるわけではない。今年はきゅうり、ナス、オクラの種まきをした。きゅうりとオクラは発芽して、畑に移植することができたが、ナスは一つも芽が出なかった。もうあかんなあ」と諦めて、ホームセンターで買った苗を植えた。義母は種から苗を育てるのが上手で、時期を逃さず種まきをし、水やりはもとより、寒さにやられないように新聞紙をかぶせたりして細やかな世話をして発芽させ、しっかりとした苗を作っていた。私も真似をしたと思うのだがなかなか思うようにはできない。年季も思い入れも違うのだから仕方ないかな。おばあちゃんはおいしいきゅうりやかぼちゃなどを食べると、種を洗い、乾かし、何年にとったかわかるようにして、

油彩「小生と愛犬ジミー」
安東公一



カンカンに保存して次の種まきに使っていた。

生命力を詰め込んだ種もいいが、こぼれ種にも魅力がいつぱい。来年の春、私は飽きもせずこぼれ種から芽生えた苗を探していると思う。

老・老・老・老・老と生きて・・・ 安東公一

小生、老・老・老と生きて来て、現在八十六歳、人間には生きていくのに水が必要のように、絶対に必要なものがあると思うんです。

それは、「生きるっていいなあ」と言う希望です。そこに辿り着くために生きようと思うんです。迫りくる「死」という事実に対して、私は特に「怖い」とは



感じないが、私にはしたいことがまだまだ一杯あるので、こちらの世界で生きていたいと思っている。燃え尽きる、その瞬間までひたむきに生き抜けようと思っている。

視野を広げて自分の出来ることを最大限やっていたら「未来は必ず良くなる」と信じている。幕の引き方で価値が決まると…

まだまだ未熟だが、しなければならぬことがいっぱいなので、こちらの世界で生きたいと考えている。毎日仏壇に手を合わせ、先に逝った妻に「もう少し迎えにこないでくれ」と頼んでいる。

海外旅行は私の視野を広げてくれ、趣味の油絵に「生きる喜び」をプラスしてくれ、ただ凡々と生きて居ればいいんです。

勝った、負けたなど何かをなさなければと、きばって生きるだなんて「しんどい」ではないですか。

「神は、一つの扉を閉めたら、必ず新しい窓を開いてくれる。」これが小生の座右の銘です。

「ええ死に」とは

黒石初江

六年前、実家の父は九十四歳で亡くなった。癌の末期で一時帰宅していた時のこと、父の妹二人が見舞いに来てくれて別れしなに耳もとで、「ええ死にをしようで」と大きな声で言って帰って行った。

その翌日、近くの病院に父は再入院し、点滴攻めの毎日となった。「足がパンパンに腫れて苦しがる」と弟

春のクリスマスローズから夏のハナミズキ、秋の紅葉、冬の落葉等々と自然を楽しみながら…老々介護に感謝しながら…老・老・老と生きています。

から聞かされた私は、少し前に末期癌の義母を見送った友人に相談したところ、友人は岡山市内にある緩和ケアの病院を紹介してくれた。すぐに弟が手続きに奔走して、父は程無くその病院に転院した。

そこでは絶食が解かれて「食べたい物をいつでも食べたいだけあげてください」と言われて、欲しい物を

少しづつ口にした。鎮痛剤により痛み
の無くなった父は、少しは話も
きたり、遠方から駆け付けた孫や曾
孫とも触れ合ったりして、穏やかな
時を過ごしていた。父は転院して五
日目の朝、好きだったお酒の少々を
口にした後、だんだんと意識が遠の
き、昼前に亡くなった。

子供たちが取り囲む中、眠ったま
まの安らかな最期だった。

六年前に「ええ死にしようで」と
言った二人の叔母の姉の方は、今年
の二月に老人介護施設で亡くなった。
夜中に巡回した職員が、亡くなって
いるのを発見したとのこと。誰にも
看取られることなく、ひとり静かに
息を引き取ったらしい。

二人の叔母の妹の方は、九十四歳
となった今も、なんとか元気に自宅
で「ひとり暮らし」を続けている。

この叔母がどのような「死に」を
迎えるのか、できれば、本人にとつ
ての「ええ死に」であって欲しい。



絵手紙 栗井春子

歴史紀行

大きなできごと

些細な歩み

みな

人間の歴史

かたりべとなって

伝えよう



太陽と鳥居の不思議な現象

—黄経〇度の神社—

横山 征彦

神社のある所また神社が鎮座している所には由来や歴史伝説等々がある。その中で暦の二十四節気にかかる神社の鎮座が作東町(旧名。以下同じ)の内に二カ所判明している。

一か所は宮原に在る天曳神社、二カ所目は粟井の春日神社である。各々は一年中で関係する節気は異なるが、孰れも太陽に関する事である。本稿では、宮原の天曳神社について話す。私の先代の宮司・横山捷彦より聞いている事だが、牛飼荒神雨降宮と言われた頃は、現在地の山に安鎮されていた(その位置が後になつて重要な事となる)。その後、山を人力により切り開き現在の所に鎮座

した時に天曳神社となつたと聞いている。その場所より西へ参道が伸びこの御門が本田彦三郎宅より百メートルぐら以下の所に、今は道路の下になつているが、当時は石積みがあり「鼻高屋敷」と言われていた御旅所があつた。それより参道が西に延びて現存している鳥居に繋がる。今は圃場整備をして今までの面影はないが、横野次男宅の前に三十〜四十メートルぐらいが残っている。吉野小学校の東側にある鳥居の田に一の御門があつた。今は拙宅の東側に五社殿として現存しているが、昔の様ではない。

その鳥居のある場所と鼻高屋敷が

あつたと思う点と神社の場所が一直線になつている。その延長に東に伊勢神宮、二見神社、西に出雲大社の日ノ御崎が日本地図に定規を当てるで一線上になる。その中間の位置に天曳神社がある事が判つた。日本地図に定規を当てれば誰でも判る事である。では何故にその様な事が大切な事かをこれより説明しよう。

わが国は一年を通すと四季があり、それにはさまざまな区分法がある。その一つに、春とは春分から夏至前日(三月二十一日頃)から六月二十一日頃まで、夏とは夏至から秋分前日(六月二十二日頃)から九月二十二日頃まで、秋とは秋分から冬至前日(九月二十三日)から十二月二十一日頃まで、冬とは冬至から春分前日(十二月二十二日頃)から三月二十日頃まで)という区分がある。暦の

上では幾分変わり、春は立春から立夏前日、夏は立夏から立秋前日、秋は立秋から立冬前日、冬は立冬から立春前日を言う。であるから、春の区分、夏の区分、秋の区分、冬の区分が判つたと思ふ。

では、暦の二十四節氣と太陽の關係を少し述べておかないと理解しにくいと思ふ。立春は旧暦の正月、寅の日の正節で新暦一月四日頃(節分の翌日)である。先に述べたとおり冬から春に移る時節に当たり、天文学的には太陽が黄経三二五度の点を通過する時を言う。雨水は立春後十五日目に当たり太陽は黄経三三〇度の点を通過する。啓蟄は新暦三月五六日頃、太陽が黄経三四五度の点を通過する、春分は三月二十一日頃で太陽が黄経〇度(春分点)を通過する時を言う。清明は春分後十五日目に

当たり、新暦では四月四五日頃で太陽が黄経十五度の点を通過する時を言う。穀雨は新暦四月二十日頃で太陽が黄経三十度の点を通過する時を言う。立夏は新暦五月五六日頃で太陽が黄経四十五度の点を通過する時を言う。小満は立春後十五日目に当たり新暦五月二十一日頃で太陽が黄経六十度の点を通過する時を言う。芒種は新暦六月五六日頃で太陽が黄経七十五度の点を通過する時を言う。

夏至は新暦六月二十一日ころで太陽が黄経九十度の点を通過する時を言う。太陽は赤道から最も北に離れ(赤緯二十三度半)、北半球では南中の高度が最も高くなり、北半球では昼が最も長くなり夜が最も短くなる。

ここで「太陽の黄経」とは、地球上の一点から黄道に下した大円を春分点から測つた角距離。赤経と同じ

く春分点から東の方へ測る。黄緯また赤経とは、地球上における星の位置を表す座標のひとつ。地球上の赤道を基準とする。星を通過する経線(時圏)と春分点を通過する経線とが天の北極においてなす角度。春分点から東に測り、〇度から三六〇度までは〇度から二四時まで。↑赤緯(以上、『広辞苑』より)

以上で二十四節氣と太陽の關係は終わり、これより本題の話に入ろう。

春分の日と春分〇度のつながりは理解していただけと思ふ。その現象が天叟神社である事が判明した。まず春分の日、吉野小学校東側にある鳥居の位置より東を仰ぐと御来光(日の出)が鳥居の真つ心より上り、その日の〇度には神社の奥の院に石積み印がある所(前に書いた牛飼荒神の跡地の北になる位置)



伊勢神宮 (伊勢)

で○時頃となり、その日は出雲大社の西に当たる日の御崎へ太陽が沈む。この現象が春分の日を中心に二日ある。当日は二見神社の夫婦岩の真ん中より太陽が昇る事を聞けば、神話(『日本書紀』)に出てくる天孫降臨の事が思い出される。その時、天照大神の孫・瓊瓊杵尊の前を祓い清めたのが猿田彦の神(当神社の御祭神。方除けの神様。生活の水先案内を司る



天叟神社 (宮原)

氏神様である。春分の日(黄経○度)には、太陽の通る黄道に伊勢神宮、天叟神社、出雲大社が東から一直線上になる。この事が先人達の知恵だと思えば、この不思議な現象を大切に後世に伝えなければと考えるものである。思うに、先代達の言い伝えはやはり本当の事がある。それは自分自身で経験しなければ、本当の事はわか



日御碕神社 (出雲)

らないということと、今生活している我々がその事を理解して保存・継続しなければ、後世に汚点を残すことになる。例えば、鼻高屋敷のように今無くなってしまえば、後世に歴史を知らせる術もない。以上、一言へんを走らせた。後掲になつたが、黄経○度の三社の写真を添えておく。

美作を愛した歌人と俳人

平賀元義と阿部青鞋

矢内直行

美作の香しい風土と床しい歴史を
思えば、この地を愛した文学者は数
知れぬことだろう。あえて二人だけ
を掲げるのは、作曲を事とする私に
偶々縁があったからにすぎない。

平賀元義一八〇〇～一八六〇は
江戸時代末期の国学者・歌人。現在
の倉敷市玉島に生まれ、生涯に渡っ
て岡山県内を放浪し、行く土地ごと
に歴史(神社・旧跡の由来など)を調
べ、和歌を詠んだ。多くの門人に慕
われ、作風は万葉集を規範として大
らか、豪快である。後に正岡子規は
元義を「秀でた万葉歌人」として高
く評価した。那岐山、能登香山、梶
並川、吉野川、豊国神社、天曳神社、

白鷺の湯 杉坂峠など、詠まれた場
所をたどれば美作全域の地図となる。
元義の和歌は音が明るく滑らかな故
歌曲になり易い。私もその足跡を辿
り歌曲集としてまとめている。

作東ゆかりの三首
能登香山かゆきかくゆき妹と
吾秋の紅葉を今日も見ると
名ぐはしき吉野の山に白たへの
雲さへはれて照る月夜蚊牛鳴
御軍の仇防ぎしは昔にて
松のみ立てり杉坂の関
俳人の阿部青鞋(一九一四～一九
八九)は東京に生まれ、戦時中に友人
の誘いで英田郡巨勢村に疎開して以
来、この地が気に入って終戦後も住

み続けた。津山市出身の西東三鬼ら
と新興俳句運動の旗手として、活躍
し、現代俳句の可能性を拓いた独自
の作風は現在も光を失わない。移住
者であったが、地域社会に積極的に
溶け込んで、俳句や英語を教える一
方、町の社会教育主事を務め、やが
ては教会の牧師となった。直接、存
じの方もおられるかも知れない。彼
の句は哲学的で難解なものもあるが、
日常的・庶民的でユーモアを交えた
明るく自由な作品も多い。

虹自身時間ありと思ひけり
ひつぱたたくためにキャベツを育て
居り

これらを含めて歌曲とした拙作を
『俳句による歌曲』と入力してユー
チューブを検索して、視聴ください。

(津山市在住)



赤磐市高田の歌碑



赤磐市稲蒔の歌碑

因幡と美作の漆の歴史

橋谷田岩男

平安時代の律令制度に中男作物ちゆうなんさくもつという課税調がありました(延喜式九二七)。因幡地方は、漆の貢進が義務付けられて、五畿七道のひとつ山陰道を通って都に運ばれました。因幡地方と漆の関係は古いとされています。

因幡地方一円とは言わずとも、智頭郷(智頭、用瀬、佐治)は漆産地でした。その一番の漆産地が、佐治でした。現在は、鳥取市と合併して佐治町となり、私たちによって佐治漆復活運動が進められています。

鳥取漆器の起源は、鳥取藩初代藩主池田光仲公が備前の池田光政公とお国替えの時に、備前から塗師ぬしを連れてきて御用塗師としました。それ

以後、鳥取城下で因幡の漆器が作られるようになりました。また漆は、佐治を中心として鳥取藩の保護と奨励によって増産され、藩内の自家消費と北前船で大阪に出荷され藩の重要な財源になっていました。佐治漆は、幕末には三三貫目(約一一〇〇kg、五二〇〇本の漆樹と記録があります)。

その後、明治、大正、昭和まで漆器産業は続きますが、太平洋戦争と鳥取大地震(一九四三)、鳥取大火(一九五二)による影響で衰退し、現在は漆器産業として存在していません。

智頭町は、鎌倉殿の時代には漆の生産は多少あったようですが、現在は林業が中心で、漆の文化は根付い

ていません。唯一漆器を鑑賞できる場所があります。そこは、山陰の山林王と呼ばれた国の重要文化財石谷家住宅です。毎年お雛祭りの時期になると、蔵のギャラリーで歴代のお雛様が展示され見事なものです。その中に、蒔絵の入った皆朱の椀が展示されます。高級な蒔絵の入ったお椀は、輪島漆器のようです。これらの漆器は、石谷家の繁栄を象徴する品々です。



写真1 葵の御紋入りの刀掛け

(鳥取県立博物館蔵)
(田光仲公の夫人 紀州徳川頼宣の娘。家康の孫 葵の御紋)

真庭市に郷原というところがあります。ここは、備中漆と栗の木地を使った郷原漆器(岡山県指定郷土伝統的工芸品)で有名です。もともとは出雲街道沿いの宿場町であり、ここに漆器が生まれました。ここは、木地屋と塗師屋が共存していた地域で、技術も黒江(和州)や輪島、会津から導入し、郷原漆器は出雲街道を通じて出雲、因幡、備前方面に流通がなされていたようです。現在、漆の館が建てられ、漆木の植栽、椀づくり、漆器と一連した小規模の地方漆産業のモデル地区になっています。津山には、刀の鞘師がいますが、塗師はいません。以前に鞘塗を依頼されたことがあります。

因幡地方も作東地方も、山林に囲まれ、木地師が多かった地域であり、山の自然資源を生活の生業として生



写真2 池田家御紋丸に揚羽蝶 隅切膳 皆朱
(鳥取県立博物館所蔵)

きてきたその証が、漆文化であり木地文化なのでしょう。現在、右手木地山の小椋勉さんや作東の木工家である永野宜治さんや花田晃子さんの作品に漆を塗った作品づくりをしています。漆塗り教室などを通して、新たな因幡と作東の漆文化交流が進むことを念じております。

(智頭町在住)

角南の地名と姓

井口祥子

角南^{すなみ}は、全体が盆地状になっており、その真ん中に小島のような山がある。その山は、前方後円墳のような形をしており樹木が密生している。山の名は丸山と言われている。その頂上に角南神社がある。鳥居の所から石段を百六段のぼると、広場があり、駐車場にもなったり、以前は、ゲートボール場として、村の人が練習場としてゲートボールを楽しんできた。そこには「角南圃場整備事業完成記念碑」が立てられている。

そこから又、三十段登ると、お宮にたどり着く。角南神社は角南の中心的存在である。

そして、何年か前のある時、お宮の行事があった時、賽銭箱を開ける

と、中に紙片が入っており、盛岡市上堂という所に住まわれている角南昭さんという方がお参りされたと言われている。そこで、角南昭さんにお手紙を差し上げると、すぐお返事が届き、

「先代は戦で足に大怪我を負い、びっこを引いて逃れてきたとのこと、侍ではなく医者として伊達家に匿ってもらった事等から関ヶ原の後にこの地に来たものと思います。

侍として徳川の家臣で戦った人、宇喜多の家臣として戦った人等、角南姓の侍が両軍に分かれて戦ったようです。どちらの流れにしても旧角南村に生まれた先代達が私たちの先祖でもあります。」と書かれています



角南神社

これは、中世の頃の出来事と推察されます。私の手元にある「角南伝聞記」によれば、「角南家ハ代々此地ニ住シ東作州ニ比類ナキ旧家ナレバ少領庄地頭職等に補佐セラルモノ数代ニシテ赤松家全盛ノ頃ハ江見南庄山家地貳百貫ヲ領シ威勢最盛ナレバ赤松正則ノ兵ヲ起シテ山名氏ト戦フ」とある。

しかし、今角南の地に角南姓は一軒もない。ただ、私の夫は、もともと角南姓で奇しくも角南の地へ縁あり、やって来て五十有余年になる。

夫の生家の角南家系図をたどれば、

「鎌倉ヨリ討手ヲノガレタ重秀ハ、一族光重ヲ頼リテ西国ニ赴キ美作国河合郷ニカクレ後ニ光重ノ庇護ヲウケ同国山家郷角南村ニ土着シ村ノ名ヲモツテ氏ニ角南彈正重秀ト改姓ニ尾越下云フトコロニ砦ヲ築ク」とある。

小泉八雲の出雲街道急ぎ旅

延原順子

る。

角南の地も高齢化が進み空家も増えていくけれど住民は皆、働き者で仕事にいそしんでいる。角南姓を名乗られる先祖の地として、地域の方々と共に、角南の地を守ってきたい。

英国軍医を父に持つラフカデイオ・ハーンが来日したのは明治二十三年、四十歳の時でした。当時彼は、アメリカで作家やジャーナリストとして活躍していましたが、ニューオーリンズで開催されていた万国博覧会で日本政府の官僚・服部一三と出会い、日本文化に深い興味を持ち来日を決意します。

来日後は、広く知られているように松江で暮らし、帰化して小泉八雲となり、日本の民話や幽霊話を、あの有名な『耳なし芳一』や『雪女』のように怪談として世に広めました。この小泉八雲が来日直後、松江に英語教師として赴任する道中記を『日本の面影』に美しく感動的な日本として表現していますが、ここで



松江市のハーン邸

描かれているのは、いったい出雲街道のどのあたりなのか。実は八雲は通過した場所を特定できる地名を記していません。現在はつきりとしているのは鳥取県の上市、下市のみで、出雲街道の名すら出てきません。さらに、その中で「人の通らない道を選んだ」という一文があったため、八雲の研究者は「出雲街道を通らなかった」と結論つけています。

しかし、当時の横浜からの鉄道と道路事情を考慮して、近年では姫路から出雲街道を辿り、勝山あたりから中国山脈を越して山陰に向かったという説が有力になっています。八雲が旅の始まりに「今から四日間の旅である」と述べていることから姫路を出発して出雲街道を進み、三泊四日の行程で松江に向かったと思われま

す。姫路から三泊四日ということは、その内一泊は鳥取県の上市であり、あとの二泊を出雲街道の美作のどこかに投宿していることが推測されます。姫路から人力車の進む距離を考えると、佐用、土居、勝間田、津山、勝山のいずれかだと思えますが、裏付ける記述が見つかっていません。百三十年ほど昔、人力車に乗った外国人が美作の街を通過したという



山鳥毛(備前長船刀剣博物館)

旅の感動

それだけのことですが、八雲が日本で生活したのは、五十四歳で亡くなる迄の僅か十四年間のことです。この間に残した彼の仕事を考えた時、ほんの一瞬の出会いではありませんが、

彼の目に映った出雲街道を、当時を想いを馳せ令和の視線で辿ってみるのも良いものではないでしょうか。
(稲美町在住)

山本進一郎

去る七月二十四日、作東文化協会主催の研修旅行が、会員十七名の参加を得て実施された。同行しましたのでその概要を報告いたします。

のと香観光の大型バスを借りて、作東総合支所図書館前を八時に出発。第一の目的地備前おさふね刀剣の里「備前長船刀剣博物館」を訪ねました。最近、クラウドファンディングで国宝の「太刀 無銘一文字(山鳥毛)」を所蔵して話題になりました。

この太刀は鎌倉時代中期、備前の国福岡の地で活動していた刀工集団福岡一文字派の生み出した屈指の名刀として知られています。また、この太刀は戦国時代の名将上杉謙信・景勝親子の愛刀として有名です。残念ながらこの日は展示されていませんでした。動画で拝見しました。この日特別展示として第二次大戦中集められた「赤羽刀」がありました。この赤羽刀は戦後岡山県に多くの配分があったとのこと。そのほか展示の美しい日本刀を堪能しました。

次に会陽はだか祭で有名な西大寺観音院を見学しました。広い境内があり中央に本尊千手観音を安置する本堂があり、そのほか仁王門、三重塔、大師堂、牛王所宮、鐘楼などの建物がある。特別に副住職の懇切丁寧な案内で、本堂や牛王所宮の内

陣を拝観しました。

会陽の時住職が宝木しんぎを投下する御福窓も拝見した。

昼食の後、夢二生家記念館と少年山荘を訪問。生家は茅葺のこじんまりとした民家で、あった彼の遺品や作品の展示もあり、また紹介の動画もありました。少年山荘は夢二自身の設計によるアトリエ兼住居であり、夢二が晩年に東京に建てたものを当時の姿を忠実に復元したもの。全部で七室ありバラエティーに富んだ部屋の設えであった。夢二は五十年の生涯で多くの仕事をしたものだと感嘆しました。この後、牛窓オリーブ園を見て帰路につき、予定通り午後五時前に帰着しました。

夢二生家袋掛けたる葡萄の木

夢二生家扇風機に揺る童子の絵

炎天下会陽のざわめき西大寺



時代と共に生きる

妹尾美智子

「刀一本に五億円」瀬戸内市の山鳥毛の里帰りへの挑戦は、瀬戸内市が日本刀と歩んできた長い歴史と優れた刀工を輩出してきたという土地柄と日本の匠の伝統を後世に継承発



竹久夢二生家

展させるといふ大きな目標を持って山鳥毛の里帰りを実現させた。日本刀の伝統と技術を伝承する長船刀剣博物館では、刀の展示、刀と武士など日本刀の文化を知る機会を得ることができました。残念ながら山鳥毛のレプリカにしか会うことができませんでしたが、長い歴史を得て生まれ故郷に戻ってきた備前刀の最高峰「山鳥毛」はこれからも刀剣女子、刀剣男子を楽しませてくれるでしょう。

西大寺観音院のはだか祭り会場は、厳冬の夜、まわしを締めた勇壮な男たちが冷水に入り、大願成就を念じて水垢離をとり、御福にあやかろうと「陰」と「陽」の二本の宝木を奪

い合う勇壮なお祭り、宝木を賜った福男は「牛王宝印」をいただくことができる。奈良時代から始まったというが、時代の中で変化しながらも西大寺会場には多くの参拝者が境内を埋め尽くしている。

夢二生家記念館では、イケメンの夢二が出迎えてくれて、幼少時代の生活空間や叙情的な美人画の世界を観ることができました。

最後に牛窓オリブ園。オリブの園から見る瀬戸内の美しい海景をカメラに収めました。

それぞれの郷土には昔の人の生活がにじんでおり、このことを後世の人々に伝えることは、いつの時代においても必要なことだと、今回の文化協会の旅行で気づかされたように思います。

令和四年度研修旅行の報告

令和四年度の研修旅行は、七月二
四日（日）午前八時から午後五時前
の日程で実施しました。コロナ禍の
影響で三年ぶりの開催となりました
が、バス会社（のと香観光・龍門運
転手）の万全な防疫対策と参加者十
七名の自己防疫責任によって実施し
ました。

研修（見学）先は、備前長船刀剣博
物館、西大寺観音院、竹久夢二記念
施設、牛窓オリーブ園の四か所で、
昼食は「味の民芸」でした。

所要七時間の旅行の帰途、バスの
中で参加者全員から研修旅行の感想
を概ね三つの視点で頂戴しました。
本稿では、その概略を記録としてご
紹介して、来年度の研修旅行の参考
にしたいと思います。

一 今回の研修先について

今回の研修先で良かった（感銘を
受けた）所についてお尋ねしたとこ
ろ、複数回答ですが、西大寺観音院
七六％、長船刀剣博物館五三％、竹
久夢二記念施設一九％、牛窓オリー
ブ園一八％でした。

なお、それぞれの見学先について
良かった点や興味を持たれた点など
をお尋ねしたところ、次のようなご
感想を頂きました。

① 備前長船刀剣博物館

- ・ 太刀と刀の違い、赤羽刀の歴史、
鉄と熱処理の関係、その美術品の価
値、刀と日本人とのかかわりあいな
どに興味を抱いた。
- ・ 山鳥毛の所蔵で長船は日本刀の聖

地であることを知った。長い歴史の
中で日本刀が盛んに作られたことに
いろいろな面でこの地が適地であっ
たこともあるが、守り伝えてきたこ
とに感激した。

- ・ 長船の刀剣では一つの刀に色々な
作業や工程があることを知った。
- ・ 博物館の展示品が良かった。山鳥
毛を見たかったが、珍しい刀剣類の
歴史を理解することができた。

② 西大寺観音院

- ・ 歴史を感じる古い建物の荘厳な内
部を拝観したり懇切丁寧な説明があ
りがたかった。また、普段見られな
い所を多く見ることができた。
- ・ TVでしか知らなかった西大寺会
陽などのご説明で会陽の内容がよく
理解できて会陽に興味を持った。
- ・ 西大寺は元は「犀戴寺」だったと
の説明を聞き、西暦七百年代の寺院

と吉井川通運での地域の生業に強い関心を持った。

③ 竹久夢二記念施設

・竹久夢二の生家を訪れたいとの長年の希望がかなった。

・夢二の絵の世界に興味を持った。

また、夢二の人の柄を知った。

・夢二の生家も大変に興味深く夢二は繊細な方だったのだと感じた。

④ 牛窓オリーブ園

・オリーブ園では景観が良く、久しぶりに瀬戸内海の島々の美しさに感動した。

以上、どここの施設見学に関しても大半の参加者が「案内が親切だった、説明が詳しかった」との感想でした。

二 研修旅行のご感想について

今回の旅行のご感想などをお尋ねしたところ、次のような好印象のご

回答を頂きました。

・コロナの中での大きな決断でした。状況分析と判断は難しい。

・ウイズコロナで心配したが、晴天に恵まれ、県民割が使えてよかったです。

・久しぶりの旅行でゆったりと楽しいひと時をすごせて心が満たされた。

・作東文化協会の仲間たちと楽しく旅行ができて元気がもたらえた。

・一日四か所も見学できました。研修先の案内もよく、安価な料金で旅行ができてありがたかった。見物の時間配分が良かった。良い企画だった。

・初参加だったが、良い旅行だった。また、参加者のマナーが良かった。

三 来年の研修旅行先について

来年度の研修旅行の行先についてお尋ねしたところ、鳥取方面四一%、西播磨方面二四%、岡山県内一七%

その他一八%でした。なお、岡山県内については、下津井、児島、倉敷又は備中地域を希望するというものです。

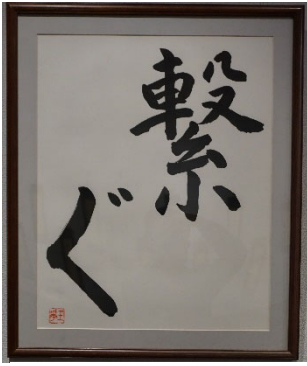


西大寺観音院

令和三年度文化展の報告

作東文化協会では、昨年度の秋と春の二回文化展を作東美術館とバレンタインプラザ一階にて開催しました。作東の文化力とその精神を繋いでいこうという思いから、文化展のテーマは「繋ぐ」としました。

出展された作品は、秋・春とも、生け花、短歌、晝道、水彩画、油彩画、墨絵、絵手紙、ちぎり絵、篆刻、写真、手芸、木工品、漆器、古文書



テーマ「繋ぐ」

解説など、十五を超える分野から力作揃いの展示が集まりました。

入場者数は、秋は約三百名、春は約二百名でした。秋春いずれも美術館入り口の受付で体温測定するなど万全なコロナ禍対策を行いました。

展示会場には家族連れなど大勢の市民の方々が来られて観賞され、また、出展者も出展作品を案内をされたり作品製作の説明などをしてお話がはずんでいました。

本年令和四年度も秋と春の文化展に向けて会員の精力的な製作活動が進められるものと期待しております。なお、芸能の分野は、しばらく中止しておりますが、作東芸能文化の火を絶やすことのないよう、来年の春

には芸能発表会を開催したいと望んでおります。

バレンタインプラザの生け花



作東美術館での展示

短文芸

生きている
あかしとしての
自分の思いを
自分の言葉で
表現する
その表現が
万人の魂を
ゆり動かす
短文芸の力
伝統文化の力



俳句

走り茶

春名はるを

冬波の荒れて逆巻く日本海

片栗の花を尋ねて老の杖

青嵐の吹きぬけていく城下町

風鈴の風待つ時をまどろみぬ

走り茶を振る舞はれたる軒の下

一瞬の夢

豊田絢子

おのが身に光まとひてつくしんぼ

一瞬の夢ふくらむやしやぼん玉

ふらここやつかみそこなふ雲の端

葉桜や道行く人の今はなし

池田家の藩主の墓場落葉山



織部灯籠

山本宗雨

土竜めの目覚めたる跡春耕す
観梅や香り聞くのは弱法師か
露のたう緑の玉でまだありぬ
バラ剪定三度目にしてかなひたる
春雨や織部灯籠の石の色

笹百合

青山美和子

煽^{あお}られて葉桜騒ぐ午後の里
木々の枝巻きつ巻かれて藤の花
朝日受け揺ぐ葉先に雨蛙
宮の森騒^{さわ}つく風に木実降る
笹百合の揺れる峠に石地藏

音

沖田はるみ

宮櫓の薪もてつなぐ去年今年
日を返す音ある如し鼓草
軒涼し長押に古き弓と槍
桔梗の蕾の玉とふくらみて
嵩落葉裏参道は深山道

雨蛙のヒツチハイク

井上虹里

放たれし鶏の掻き出す春の土
こと切れしスマホの電池石鹼玉
雨蛙フロントガラス遠き旅
尻振りて花野を走る姫新線
仏像に極似^{ごくに}の石や秋の声

残 菊

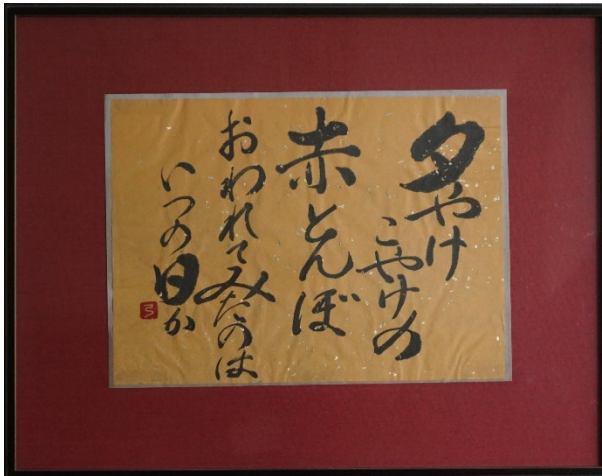
井口祥子

残菊の色褪^あせるとも今生きる
バイバイと手振る幼子風光る
夜べの雨葉桜の先光りをり
岸に坐し寸暇を惜しみよもぎ摘む
地平線天地溶け合う秋の暮

若 葉 風

杉本幸子(土居)

渾身のりハビリ励む玉の汗
いつ見ても笑顔の人や若葉風
耳鳴りと想えば夜の虫の音や
車イス別れと歩む絶対に
春の日にやさしくゆれ咲くコゴメ花



書 田中真弓

青 嵐

高橋ヤエ子

花杏朽ちた厨の通し庭
久々の若き新入り溝浚え
向かい山一村抱え青嵐
庭先の畑へゆくにも夏帽子
雲の峰綿菓子溶けてゆくごとく

葉 桜

樽井悦子

雨降りて青葉の山が迫り来る
葉桜に夕日輝やき絵筆取る
背のびして摘む枝切れず花笑う
句会より贈られし花今さかり
リハビリの笑顔の指導うれしくて

C O 2

坂井はつ子

焦げて落つる山茶花拾ふ日課かな
陽炎や車椅子押し野地を行く
CO2をば生産なすか庭の草
蓮華田と見れば寝ころびたき思ひ
野蒜つむ玉のやうなる根を揃へ

秋 夕 焼

山本眞由美

夏深し新婦の捧ぐフラダンス
宿題のミシンの音や秋暑し
田も畑も山となりけり秋夕焼
柿食ひて種出すことの楽しさよ
柚子の香や今宵長めの仕舞風呂

木槿咲く

山下三景

木槿咲く今日の仕事の定まりぬ

夕立に施肥の流れで風やみぬ

田草取る空の広さや畔遠し

山椒の実両手こぼれて母の声

窓開けて辣韭しようやくしてゐたり

ひとすぢ

山本那実

新月の揺れてをるなり初螢

群青の夜の深さを時鳥

てんと虫生命線を彷徨へり

千枚田いま千枚の芒原

ひとすぢの恋か鹿鳴くひとすぢに



書 花村智子

川柳

廻る世界

影本 守

物価高値上げ続きに値を上げる

調べ物昔辞書引き今スマホ

非暴力天まで届け民の声

翔平の活躍嬉しちむどんどん

我が家では朝食和洋がコラボする

ケンタウロス

五反舎

牛頭天王コロナ禍なき旅頼みます

赤羽刀うちの刀も研ごうかな

犀の角戴く寺は冬裸

草刈りをせねばと旅は終わりゆく

ケンタウロスこりや怪獣かお父さん



短歌



幼児

和田眞佐子

幼児の手窪に光る蛍火がそのまろき頬を闇に浮べぬ

物干しに赤・黄・ピンクの児らの服並ぶを見ては思はずスキップ

和田さんと我に抱きつきし「やす君」が少年の顔を見せ夏も終りぬ

生の齟々

島根 和江

愛に満ち吾子遊びぬし花の庭ブランコ砂場ああさやうなら

母の日のプレゼントうれし赤と緑の植物たちにしばしをたたずむ

太古より立ち枯れきたる深海樹今また我に何かを語り

馬の背

福島美智子

風紋を崩しつつ砂丘の「馬の背」を登れば眼下に蒼き日本海

やはらかなる初冬の光を纏まとひつつ猫は余生をぞつと思へり

少しづつ老いてゆくなり二人して止むる事なき平等なる時

夏の景色

佐々木美奈子

梅雨過ぎて肌に突き刺す日射しかな今年の夏は末恐ろしき

瓢箪ひょうたんの日に日に増えし白き花暑さと共にかけ上りける

夏の夜ガラス越しにて動きたる白きお腹の守宮やもりの姿

出雲街道

岩本敏子

古の山路たどりて梅香塚しばしを憩う芭蕉の句碑前

門 街道沿い夏草茂る屋敷跡昔を止とどむる西の惣

道 久々に正人しょうにん坂を訪ぬれば幼き頃の道は高速

頑張れ

杉本幸子(土居)

デイ帰り山の向こうに幸せの大きな虹出て歓声上げる

元氣出し九十の坂を一步踏み後はどこまでケセラセラセラ

リハビリで良い歩きだとほめられて次はまだまだもつと歩くと

幸せさがし

丘野道子

夜明け前鳥のさへづり寝床にて聞きつつ今日
の一日は始まる

桜咲く校門の前にて入学の子ははにかみて
カメラに向かふ

日常の暮らしの中にて夫は今幸せさがしの
遊びをしをり

小さきダム

坂井はつ子

北海道を狙うてゐるぞと亡き夫が常言うて
ぬきロシアのことを

物の値上がりはじめぬ農村が世に出る時が
来たるやも知れぬ

減反の田を皆植ゑてダムとなし河の氾濫防
ぐも良からむ



ちぎり絵「花菖蒲」 下山美好

幸くあれ

中村千州代

さきく在れ幸くあれとて子や孫を思はぬ日
ぞ無き家守りにつつ

歌好きのばあさんが居たと五十年経し頃「風
香」が孫に話すか

詠み来たる孫の言葉のいとしさよ幼の言葉
は若草のかをり



生け花 樽井悦甫

うれしいね

平瀬芳子

嬉しいね芝生の庭に吾子達は「ぶらんこ」を
漕ぐ夕陽けとばし

なんとなく悲しみ聞きてくれさうなそんな
気がするラベンダーの花

友が言ふ独りで悩んでどうするの一緒に悩
まうどうにかなるよと

温もり

岡田仍子

「寒いもう」「おはようさん」の声掛け交
じる方言に温もり感じつつ

別棟の息子夫婦との夕餉には皆で寄鍋夫に
は熱燗も

「元気か」と友よりの声嬉しかりこの一言が
心の励みに

春が来た

土井つゆ子

「シルバー」で草刈り忙しきこの夏は夫はまつ黒お疲れ様よ

大阪の息子一家と会へるのはコロナ禍の一年十ヶ月振りよ

春麗ら孫の二人に「サクラサク」コロナ禍の中すべてに感謝

指一本

末宗玲子

何事も指一本で処理できるとは言へボタンの押し方解らぬ

「IT」の「I」とは何で「T」は何それも解らずこの世を生きをり

世の中の進歩は元に戻せぬが私はいつでも過去に戻る



書(ミニ屏風) 中谷暢子

老いたる身へと

松井洋子

無くししと思ひし鍵がひよつこりと姿を現
はす芋の葉陰より

何げなく置きたる鍵を捜しをり今より前を
順に辿りて

靴底が次第に減りてゆくやうに我は変はる
か老いたる身へと



生け花 溝曾路万寿美

山峡に暮らす

黒石初江

夕間暮れ緑増したる早苗田に餌を漁りしか
ごるさぎ一羽

万緑の中歩み行く我の背を押しくるる鳥の
豊かなる声

真夜中に目覚めてかすかに耳にする虫の音
ありぬ秋は近きか

勉強モード

新田千晶

隣り家のかなちやんは今日から一年生入学
式終へ顔見せ呉れぬ

真新しき制服を着てランドセルを見せてに
つこり張り切るかなちやん

自慢げにランドセル揺らしかなちやんは「教
科書もらった」と勉強モード

今だから

日下智加枝

そぶりにて分かつてしまふ孫の手を目に探
しをれば夫が出しくるる

今だから言へることあり今だから言はぬこ
とありしみの数増えて

朝霧があをく流れゆく一人より二人でと決
めて五十と二年

八十路なる日々

豊田 絢子

八十路来て一世ひとよの残りはいくばくぞと夕映
えの桜見つつ思ふも

病いえし友に会ひたれば影にさへつまづき
さうなる歩みなりけり

大木のこずゑに群るる頬白の会話はいかに
と尋ねたき日々よ



洋画「ポインセチア」島根和江

三歳児検診

小林 洋子

入園に張り切る三歳又しても鞆に出し入れ
懸命なるかな

螻螂を見せむと曾孫を呼び寄すれば両手を
鎌に構ふる二歳

歯科検診にご褒美頂く三歳は「あのちいぢお
口開けなかつたの」と

水

長澤和枝

田植後の稲苗みどりに伸びゆきて風にそよぎつ水面のゆるる

咲きつげる乳母百合の茎がゆれており雨のつづきて紅色ましつ

軒下の折鶴蘭に水やれば飲みほすがにも消えてゆくなり



生け花 末宗悦甫

戦を憶ふ

黒石登代

曾孫の育ちゆく様思ひやるわが幼日には戦のありしに

戦地へとおもむくゆゑに帰りしとは知らずわれら姉弟伯父に甘えき

若き伯父の墓には子なき故と父がその墓に記す戦地の終歴

をりをり

入矢敏江

やはらかき文字に表はす全八首春を光を水を詠む友の

陽を浴びてゼラニウムの赤は燃えるやう吹きくる風はもう夏の風

音もなく降る雨のあさ石鉢のめだか動かずひいふうみいよ

母は百歳

濱田くに子

歳の差は九十以上母とその曾孫がしてゐる
「百人一首」

きらきらとネイルアートの爪見せて百歳の
峠を母は越えたり

大好きなるドライブとその好奇心に付き合
ひてゆかむ母は百歳

ワイン

角 利津

籠り居の独り暮らしの夕食にワインの味を
知りてしまひぬ

一勺のワインに酔ひて頬を染む我を鴨居の
夫が笑ふも

夫在りてペアで飲みぬしコーヒークップ一
つ毀れて一つになりぬ

愛 三 題

須田紀秋

「好きです」とたった一言云えぬまま傘寿
目前訃報のはがき

スキ・キライ花占いに夢託す最後の二枚は
いつもスキスキ

さりげなく車道側に身を寄せて私のルール
妻子を守る



絵手紙 江見美智子

無用の木

山下三景

けたたまし障子やぶりて油蟬夢もうつつも
朝の枕辺

青空に雲は動かず灼熱の陽を受け草刈る限
界を知る

いかにせむ次々ひろがる無用の木日陰にも
なる話題にもなる

神よ許すは勿れ

関内 惇

碎かれし他国の街の映像にかつての日本の
惨禍が顕ち来

小国を攻めて得る「利」とその罪を問はれて
失ふ「格」との差はや

神よ神許すは勿れ人類の暴挙は地球を破滅
させむに



写真「山吹」江見精治

グループ紹介

令和4年7月末現在

場 所	展 示 会 等	作 東 文 化 協 会 会 員			作 東 文 化 協 会 未 加 入 者	合 計
		作 東 地 区 内	作 東 地 区 外	子 ども (中 学 生 以 下)		
川崎教室		2		23	3	28
月曜日：高本公民館 木曜日：角南公会堂 金曜日： 西町コミュニティ		5	1	16	3	25
講師自宅		2	2	16		20
作東農村環境 改善センター	春の絵画展(作東美術館)	7	3		2	12
作東農村環境 改善センター	春の絵画展(作東美術館)	5	3		2	10
土居公民館		3				3
土居公民館		3				3
地区センター (吉野)	吉野郵便局きんちゃい館に展示	8				8
作東公民館		4	1			5
福山多目的 集会所	山の学校	4				4
作東公民館		11				11
作東公民館		7				7
作東農村環境 改善センター	プラザ展示(10月、3月)	18	12			30
作東山の学校		10				10
作東公民館		8				8
作東公民館		6	5			11
作東農村環境 改善センター		6	2			8

作東文化協会

部 名	グループ名	種 別	代表者氏名	指 導 者 氏 名	例 会
書道部	1 阿部書道会	書道	真野みよ子	真野みよ子	月4回
	2 書春名	書道	春名直子	春名直子	月3回
	3 玲華書道教室	書道	末宗玲子	末宗玲子	月3回
絵画部	4 作東水彩画教室	水彩画	妹尾美智子	関野智子	月2回
	5 作東油彩画教室	油彩画	妹尾美智子	関野智子	月2回
	6 土居水墨画	水墨画	岩本敏子	岩本敏子	月1回
	7 すみれ会	絵手紙	岩本敏子	岩本敏子	月1回
	8 ひめっ子クラブ	絵手紙	木南節子	—	月1回
	9 江見ちぎり絵教室	ちぎり絵	唐内治美	杉本幸子	月1回
	10 福山ちぎり絵教室	ちぎり絵	下山美好	杉本幸子	月1回
茶華道部	11 ひまわりの会	華道	中田敏子	中田敏甫	月2回
	12 茶の湯同好会	茶道	谷本津多江	谷本宗津	月2回
文芸部	13 あがた川短歌会	短歌	濱田くに子	関内 惇	月1回
	14 山家川俳句会	俳句	春名貞和	春名はるを	月1回
	15 作東川柳同好会	川柳	福嶋完治	—	2ヶ月に1回
歴史部	16 作東歴史地名研究会	地名研究	新田祐之	会員相互研修	月1回
	17 古文書を読む会	古文書	山本進一郎	—	月1回

グループ紹介

令和4年7月末現在

場 所	展 示 会 等	作 東 文 化 協 会 会 員			作 東 文 化 協 会 未 加 入 者	合 計
		作 東 地 区 内	作 東 地 区 外	子 ども (中 学 生 以 下)		
吉野公民館		5	2			7
作東公民館		4	5			9
作東公民館		6	6			12
作東公民館			5			5
粟井・土居・吉野各地区		22				22
作東公民館		7	5			12
旧粟井小学校音楽教室		7				7
旧粟井小学校		4	1			5
作東公民館		6	4			10
作東公民館	青葉祭、節分祭、宝妙寺	13	9			22



作東文化協会

部 名	グループ名	種 別	代表者氏名	指 導 者 氏 名	例 会
芸 能 部	18 吉野ハピネス	大正琴	主 原 生 子	富 永 仁 美	月2回
	19 あずさの会	大正琴	岩 本 敏 子	藤 谷 守	月1回
	20 作東しのめ会	大正琴	岩 本 敏 子	藤 谷 守	月1回
	21 エバーグリーン	大正琴	藤 谷 守	藤 谷 守	月1回
	24 作東吟詠愛好会	吟 詠	光 辻 猛 美	江 見 悟	月2回
カラオケ部	25 作東カラオケ同好会	カラオケ	内 田 孝 子	土 屋 博 司	月4回
	26 粟井カラオケ同好会	カラオケ	松 本 満 寿 子	—	月2回
情報映像部	29 お達者ねっと倶楽部	インターネット	鳥 形 初 美	—	月2回
手芸部	30 ビーズを楽しむ会	手 芸	野 村 啓 子	西 坂 暁 子	月1回
	31 手芸編物教室	手 芸	原 田 豊 子	原 田 豊 子 野 村 啓 子	月4回



令和3年度 作東文化協会事業実績報告

コロナ禍で活動や練習がままならず、研修旅行や芸能発表会は中止となりました。
一方で、秋の文化展は2年ぶり、春の文化展は3年ぶりの開催ができました。

【全体事業】

年	月	日	事業名	内容
3	4	23	第1回理事会	年間事業計画・会員募集・文化誌「作東の文化」(第47号)発刊・視察研修について
		7	第1回文化誌編集委員会	編集委員長の選任・編集の基本方針・編集内容・原稿募集・編集日程について
	5	14	第2回理事会	会員募集・文化誌「作東の文化」(第47号)・視察研修秋に予定・専門部グループ調査について
		14	—	会員募集開始
	7	30	—	会員募集〆切、グループ調査〆切
	8	2	第2回文化誌編集委員会	応募原稿や画像の応募数確認・種類別仕分作業 応募原稿の校正作業について
		23	第3回文化誌編集委員会	印刷原稿の校正作業
	10	8	第3回理事会	文化誌「作東の文化」(第47号)配付・活動費受渡 専門部統合、秋の文化展について
		23~24	秋の文化展	秋の文化展(作東美術館、作東バレンタインプラザ)
	4	2	3	—
8			第4回理事会	令和3年度総括、春の文化展計画
3		26~27	春の文化展	作品展示(作東バレンタインプラザ東側スペース・美作市立作東文化芸術センター美術館)
		27	令和4年度作東文化協会総会	作東バレンタインプラザ



春の文化展 受付の様子



手芸編物教室

令和3年度 作東文化協会事業実施報告

【支 部 活 動】

部 名	年	月	日	内 容
江見・豊野支部	3	5	28	評議員会（決算報告・会員募集）
		10	19	評議員会（文化誌配布・会員募集について）
土居支部	3	6	2	評議員会（決算報告・予算審議・会員募集）
		8	20	評議員会（当初計画の研修旅行について一中止を決定）
		10	12	評議員会（文化誌の配布について）
福山支部	3	6	—	会員募集
		6	—	研修旅行一コロナのため中止
		10	—	文化誌配布
	4	3	26	福山文化協会総会
粟井支部	3	6	11	評議員会
		10	15	評議員会
吉野支部	3	6	—	会員募集
		10	—	文化誌配布
		11	—	視察研修旅行中止

令和3年度 美作市文化連盟事業報告

【連 盟 事 業】

年	月	日	事 業 名	内 容
3	5	6	美作市文化連盟第1回運営委員会（総会）	美作市民センター
	6	2	文化連盟芸能発表会実行委員会	美作市民センター
	7	5	文化連盟芸能発表会実行委員会	美作市民センター
	7	25	美作文化連盟芸能発表収録会	かつた市民センター



↑ 連盟発表会 大正琴
 ← 連盟発表会 詩吟

令和3年度 作東文化協会事業実施報告

【専門部活動・1】

部名	グループ名	年	月	日	内 容
書道部	白雲書道会	(定例)			月5回開催(4.7.10月) 月2回開催(2月) 月3回開催(3月)
	阿部書道会	(定例)			毎週月～金開催 川崎教室
					山陽新聞児童生徒春競書会出品 山陽新聞児童生徒秋競書会出品
	書 春名	(定例)			月3回開催(4月～12月) (月曜高本公民館・木曜角南公会堂・金曜西町コミュニティ) 月2回開催(R4.1月)金曜西町コミュニティ 月3回開催(R4.1月)月曜高本公民館・木曜角南公会堂
玲華書道教室	(定例)			月3回開催(4月～1月) 休会(2.3月)	
絵画部	作東水彩画教室	(定例)			月2回開催
		3	5	3～5	春の絵画展(中止)
	作東油彩画教室	(定例)			月2回開催
		3	5	3～5	春の絵画展(中止)
			9	8～27	県展出品
		11	—	しんわ美術展出品(アルネ津山)	
	4	2	13～27	バレンタイン愛の美術展出品 (美作市立作東文化芸術センター美術館)	
	土居すみ絵	(定例)			月1回開催(8.9.10月)
	すみれ会(絵手紙)	(定例)			月1回開催(8.9.10月)
	吉野ひめっ子 クラブ	(定例)			月1回開催(4.6.7.9.11月) 吉野地区センター
			季節ごとに、きんちやい館・吉野郵便局にて展示		
江見ちぎり絵教室	(定例)			月1回開催(4～11月、2.3月)	
	3	12	—	教室 江見・福山合同開催	
福山ちぎり絵教室	(定例)			月1回開催(4～11月、2.3月) さくとう山の学校展示(定期的)	
	3	12	—	教室 江見・福山合同開催	
茶華道部	ひまわりの会	(定例)			月2回開催(1月は開催なし) 作東公民館
	茶の湯同好会	(定例)			月2回開催 作東公民館

【専門部活動・2】

部 名	グループ名	年	月	日	内 容	
文芸部	あがた川短歌会	(定例)			短歌会 毎月1回開催。6月、2月休会	
		3	10	—	プラザ展示	
		4	3	—	プラザ展示	
	能登香短歌会	(定例)			月1回開催	
		3	12	—	※人数が3人になったので解散	
	山家川俳句会	(定例)			月1回開催(第4土曜 作東山の学校)	
作東川柳同好会	(定例)			月1回開催 休会(11月～3月)		
歴史部	歴史地名研究会	(定例)			月1回第4火曜日開催。5月1月中止	
	古文書を読む会	(定例)			毎月第3金曜3グループに分かれての共同学習開催	
3		11	19		講話を受ける(グループ全員参加) 【講師】岡山大学 森元辰昭先生 【題】「免状を読み解く」	
芸能部	吉野ハビネス	(定例)			月2回開催	
	琴伝流大正琴あずさの会	(定例)			月1回開催(第2木曜 7.8.9.11.12.1月)	
	作東大正琴しのめ会	(定例)			月1回開催(第2木曜 7.8.9.11.12.1月)	
	作東吟詠愛好会	(定例)			4月、5月、8月各1回練習	
	(全体)	3	4	20		芸能部役員会
		3	12	7		芸能部役員会
		4	1	11		芸能部役員会
4		3	27		作東文化協会第16回芸能発表会	
カラオケ部	作東音楽同好会	(定例)			月4回開催(作東公民館)	
	粟井カラオケ同好会	(定例)			月2回開催(第2.4水曜4.5.7.8.10.2.3月) 月1回開催(11.12月)	
棋道部	双山囲碁クラブ	(定例)			囲碁交流会(毎週土曜、作東公民館)	
情報映像部	お連者ねっと倶楽部	(定例)			月2回開催	
手芸部	ビーズを楽しむ会	(定例)			月1回開催(12月は開催なし)	
	手芸編物教室	(定例)			月4回開催	
		3	6	—		青葉祭(宝妙寺)
		4	2	—		節分祭(宝妙寺)

※解散グループ 絵画部 さつき会・こぶしの会、文芸部 能登香短歌会、芸能部 コール作東、工芸部 むつみ会

作東文化協会会則

(名称)

第一条 本会は作東文化協会と称する。

(目的)

第二条 本会は作東の文化生活の向上を期すると共に、会員相互の親睦を図ることを目的とする。

(事務所)

第三条 本会の事務所は美作市教育委員会作東分室内におく。

(事業)

第四条 本会は第二条の目的を達成するために次の事業を行う。

一 講演会・研修会・展覧会等の開催。

二 文化誌などの発行。

三 その他文化の推進に関する事業。

(会員)

第五条 第二条の趣旨に賛同し本会の事業を推進する個人を会員とする。

(組織)

第六条 本会に部及び支部をつくることができる。

一部は、書道・絵画・園芸・茶華道・文芸・歴史・写真・工芸・芸能・棋道・情報映像・手芸とする。

二 支部は、江見・豊野・土居・福山・粟井・吉野

とする。

(役員)

第七条

本会に次の役員をおく。

会長一名、副会長二名、理事、部長、副部長、支部長、評議員若干名、監事二名

(役員の仕事)

第八条

一 会長は会を代表し会務を統括する。

二 副会長は会長を補佐し会長に支障があつた場合は会務を代行する。

三 理事は会をつかさどる。

四 部長は部を統括し副部長は部長を補佐する。支部長は会務をつかさどり支部の振興を図る。

五 評議員は運営について協議する。

七 監事は会計を管理する。

(役員を選出)

第九条

一 会長・副会長は理事会で選出し総会で承認を受ける。

二 監事は総会において選出する。

三 理事は部長・副部長・支部長をもってあてる。部長・副部長は部で、支部長は支部において選任する。

五 評議員は部長・副部長・支部長が推薦し理事会において選任することができる。

六 任期中途の補充役員は理事会において選任することができる。

(事務局担当者)

第十条 事務局担当者は会長が委嘱する。

(役員任期)

第十一条 一 役員任期は二年とする。ただし再選を妨げない。

二 任期中の補充役員任期は前者の残任期間とする。

(顧問及び参与)

第十二条 本会に特別顧問・顧問及び参与をおくことができる。特別顧問・顧問及び参与は総会の同意をえて会長が委嘱する。

(会議)

第十三条

一 総会は毎年一回開催することができる。但し必要に応じて会長は理事会の承認を得て臨時総会を開催することができる。

二 評議員会を以て総会に代えることができる。

三 理事会は年四回開催する。但し必要に応じて臨時理事会を開催することができる。

(経費)

第十四条 本会の経費は会費・補助金・市よりの事業委託料・その他をもってあてる。

一 会員は年額一口一、〇〇〇円の会費を納入するものとする。

(会計年度)

第十五条 本会の会計年度は毎年四月一日に始まり三月三十一日をもって終わる。

(会則の改正)

第十六条 この会則は、総会の決議により改正することができる。

(付則)

- 一 この会則は昭和六十三年四月一日より施行する。
- 二 平成十年三月二十九日会則一部改正 平成十年四月一日より施行する。
- 三 平成十一年三月二十一日会則一部改正 平成十一年四月一日より施行する。
- 四 平成十四年三月二十四日会則一部改正 平成十四年四月一日より施行する。
- 五 平成十七年三月二十一日会則一部改正 平成十七年四月一日より施行する。
- 六 平成二十年三月二十八日会則一部改正 平成二十年四月一日より施行する。
- 七 平成二十一年三月二十二日会則一部改正 平成二十一年四月一日より施行する。
- 八 平成二十八年三月二十七日会則一部改正 平成二十八年四月一日より施行する。
- 九 令和四年三月二十七日会則一部改正 令和三年十月八日より施行する。



編集後記



◆ 災難・コロナ禍が収まらず七波の猛威が全国に広がっています。早や三年、顔をマスクで覆い外食や飲み会の機会も減り、行きたい所にもいけず、これではコロナ前のお付合いのリズムは取り戻せないのではと不安になります。二つ目の災難は熱中症。猛烈な日差しには勝てず、早起きして草刈り、昼間は冷房で昼寝、夕方に農事する、これが熱中症から避難する農家の日課です。

◆ ところで、本誌『作東の文化』の原稿は主にチラシにより募集しますが、地域外の会員の方には積極的に声掛けして随想などの投稿をお願いするようにしております。作東以外での文化活動情報をいただけるほか地域性の異なる視点での論説をいただけることが期待できるからです。そうしたご投稿により作東地域の読者の文化的視野や識見を広げることになれば幸いです。

◆ 一方、若い人たちのご入会やご投稿が課題です。

作東文化の「繋ぎ」という観点からもご子息やお孫さんのご参加を期待します。作東で生まれ育った子供や孫たちが遠く離れて勤務し暮らしているお家では、その近況をスマホの動画や写真を見て知る日常となり以前ほど情報不足はなくなりました。とはいえ、作東暮らしの遺伝子は引き継いでほしいのが親心。ご子息やお孫さんにごふるさと情報の一つとして本誌を読む機会を与えていただきたい、縁の「繋ぎ」をしていただきたいと切に願うものです。

◆ さて、今回頂いた多くの玉稿の中に「目から鱗」と思えるお話があります。

協会特別顧問の横山猛さんが「新たな挑戦と考える書いてみる」と執筆されたひらがな短歌二十首。読むと千年さかのぼる不思議な感銘を受けます。

前田留菜さんの「田んぼ暮らし」は、筆者ご自身が農家暮らしの新スタイルを作り稲作の現場を俳句の舞台にして暮らす。その生き方の印象は強烈です。

谷口勝昭さんの「楽しかった音楽人生」は、作東の隣の西播磨(佐用)でオーケストラ演奏会を率いていた音楽文化人のお話です。

「走れワン君」の圓東光夫さんが展開する愛犬との会話は愉快でもあり読み書き話す百一歳の元気に感動します。圓東さんは後期高齢青年団の目標です。

また、横山征彦さんの「太陽と鳥居の不思議な現象」は、七世紀初頭に創建された天叟神社の鳥居と太陽の運行が奈良キトラ古墳壁画の黄道図に通じるお話であること、また、天文学の黄道のドラマが作東(五名)にあることは驚きです。

◆本誌には、七月の研修旅行報告として参加者の感想などを掲載しております。また、昨年度の秋と春の文化展開催の模様を簡単に紹介しております。いずれもご参加いただけなかった会員とのコミュニケーションの一助になればと考えての掲載です。

◆今年も編集委員会では原稿の読会や入稿原稿の校正(二回)などの作業を丁寧に続けて第四八号を上梓することができました。本誌第四八号の制作にご協力いただいた会員の方々に心から御礼申し上げますとともに、協会運営に何かとご助力頂いている支部長・評議員の方々に厚く感謝申し上げます。

編集委員一同





令和4年春の作東公民館

作 東 の 文 化

第48号

令和4年10月1日発行

編 集 作東文化協会文化誌編集委員会
(美作市教育委員会社会教育課)

編 集 委 員	鳥形 初美	中田 敏子	新田 祐之
	山本 直人	末宗 玲子	春名 貞和
	山本 進一郎	妹尾 美智子	山下 亨
	江見 精治		

発 行 所 作 東 文 化 協 会
岡山県美作市教育委員会 社会教育課
〒709-4234 岡山県美作市江見945
TEL(0868)72-2900
HPアドレス <http://bunka.boj.jp/>

印 刷 所 株式会社プリントバック
〒617-0003 京都府向日市森本町野田 3-1
URL <https://www.printpac.co.jp/>



